

◆伊藤洋二 選 ～俳句歳時記より～

出所：合本俳句歳時記第三版 角川書店 平成九年五月三十日初版

【秋】

行秋の鐘つき料を取りに来る 正岡子規

子規庵のある根岸は上野の山に近いところである。お寺から鐘つき料という名目で、鐘の音の聞こえる範囲の住人に寄進を募ったと云うことを理解しないとピンと来ない。俳句の時代背景を探るのも楽しみである。俳句は歴史や地理等を広く学ぶ総合文芸である。うかうかしておれない！

瘦馬のあはれ機嫌や秋高し 村上鬼城

農耕馬を見たのは幼少の頃で、近づくと背が高く鼻息が荒い驚愕の動物で「決して後ろに立つな」と教えられました。近くのおじさんが乗馬し散歩する様は、がっちりとした正味の一馬力でした。句に読む馬は違う用途かと、馬の目のように澄んだ秋空に何故か痩せた君、如何ともし難き現実。

浮世の月見過しにけり末二年 井原西鶴

井原西鶴と云えば『日本永代蔵』の作者、と試験で暗記したが、実は江戸時代を代表する俳諧師であると知ったのも「私が選んだ滑稽句」のお蔭である。所謂ところの「論壇」なので拙い解釈でも掲載して頂ける。時に元禄六年八月辞世の句と云ふ。忠臣蔵まであと九年。古典俳句に嵌りそう。

月の雨ふるだけふると降りにけり 久保田万太郎

年間平均雨量は、約一八〇〇mm。月平均で一五〇mmです。水を大切にしましょう。ひまわり八号のお蔭で下駄を放らなくても良くなった。雨が降る仕組みは理解できるが雲の中まで実際に見たことはない。ひょっとしたら水神様が蛇口を閉め忘れたのかもしれない。天文に関する季語は一六五。素晴らしい。

石山の石より白しあきの風 松尾芭蕉

西国三十三観音霊場第十三番札所「石山寺」は未だ納経印を拝受致しておりません。西国三十三、坂東三十三、秩父三十四観音霊場で日本百観音、結願まで

あとセヶ寺です。石山寺の硅灰石と琵琶湖からの風は何れが白いか今から楽しみです。お寺の句碑鑑賞も巡礼の励み。

あをあをと滝うらがへる野分かな 角川春樹

この句から滝の裏に巣を作る「雨燕」のテレビを思い出しました。地面には降りず飛びながら寝るそうです。強風に煽られ滝が反転し苔生した秘密の罅（ねぐら）が一瞬見えました。川遊びで滝の裏側へ入ったときのこと、禁断の園は「オゾン」に包まれて神妙な気分でした。何時かイグアスの滝へ行きたい。

稲妻のゆたかなる夜も寝べきころ 中村汀女

夜の稲妻は音と光の競演です。蚊帳に潜り込むとフラッシュの後、指折り数える一、二、三、四、五そして大音響。一二三四から一二三そして一二、終には「バリバリ」。耳に栓して布団を被る。なかなか寝付かれない夏休みの小学二年生であった。やがて寝入り夢なく起きれば天井の節穴、夢を見ない眠りは何処やら。

いなびかり北よりすれば北を見る 橋本多佳子

小学四年生の担任の「男先生」の理科が楽しみでした。手作りの実験装置と一緒に作り「コツコツと頑張ること」の大切さを教えて頂きました。さて、雷も音と光と時間に方向を加えれば真実に近づきます。俳句もしかり辛辣な選評でも素直に耳を傾けましょう。甘い言葉には要注意！

露の世は露の世ながらさりながら 小林一茶

露の世と云えど一日は二十四時間。その内起きているのは約十六時間。但し自由時間には個人差があり、故に「さりながら」である。俳句は瞬間の時空を切り取る文芸とか。五万七千六百秒に創作のチャンスありとすれば、自ずと道も開けるのでは。今からでも遅くはないのであると言い聞かせつつ…、「ひらめき」は突然に来る。

水霜をたもちて菊の重さかな 宮沢賢治

「雨にも負けず」の詩人の俳句に注目しました。『菊花品評会』で審査員をした時の副賞として作られたとのこと。菊作りは先ず「土づくり」からと云う。

俳句の場合の、先ず“〇〇づくり”とは何か。その「〇〇」の解明に困難を極めています。詩は続きます。“あらゆることを自分を勘定に入れずによく見聞きし分かりそして忘れず”と。難しい！

くくりゆるくて瓢正しき形かな 杉田久女

ひょうたんの“括れ”は長年の品種改良によるものらしい。雑学のページに加えることとする。「養老の酒の瓢」にと紐でくくられて育てられていたが、野分の助けを借り束縛から解放されたのである。その後伸び伸びと育ったが、“瓢徳利”には選ばれず無念に捨てられた。バンドの穴が一つ増えた。引締めよう！

三つありて一つ用なき添水かな 河東碧梧桐

添水とは“ししおどし”の事。筆者の住宅地にも「迷い猪に注意」との放送があった。棚田沿いの小川に仕掛けられ、朝な夕な「コン、コト、コツン」と三重奏を奏でていた。今年も棚田に稔りの秋がやって来たが「コン、コト」のみで「コツン」は聞こえない。おじいさんが「コツン」を抱えて佇んでいた。その棚田にはT P Pの風が吹いていた。